文化経済学会〈日本〉2025年度研究大会 分科会プログラム

特別テーマ関連分科会　7月5日（土）10:30-13:00

1-A 特別テーマ関連分科会

座長	綿江 彰禅（一般社団法人 芸術と創造）

論題	AI社会における文化政策とデジタル社会の持続可能性
発表者	河島 伸子（同志社大学）
共同発表者	八木 匡（同志社大学）
討論者	勝浦 正樹（名城大学）

論題	音楽ストリーミングサービス市場における日本 -国内市場と国際市場の動向-
発表者	高良 佑樹（文教大学）
討論者	勝浦 正樹（名城大学）

論題	デジタル時代におけるテレビ放送産業の構造変化と持続可能性
発表者	西田 有希子（同志社大学大学院）
討論者	高良 佑樹（文教大学）

論題	親と子のデジタルゲーム行動に関する研究
発表者	仲村 敏隆（早稲田大学）
討論者	高良 佑樹（文教大学）

1-B 特別テーマ関連会員企画セッション　10:30～12:15

テーマ	文化政策研究における人文情報学的手法の導入
企画趣旨・内容	近年、行政文書のオンライン公開が一般的となり、公立文化施設のアーカイヴ整備も進んでいる。オープンサイエンスが浸透するにつれ、人文学・社会科学でも研究データの共有や（生成AIを含む）ITツールの利用が盛んになりつつある。もっとも、文化政策研究の対象には保存・蓄積しづらいメディウムも少なくなく、体系的なデータの収集・保存・活用は発展途上にある。研究の拡張性を高めるために、現在の社会・経済的制約の中でどのような研究環境を構築でき、何が実現できるのか。人文情報学の方法を切り口に、美術研究の具体的な事例を通して検討する。
登壇者	川口雅子（国立アートリサーチセンター情報資源グループグループリーダー） - 私立美術館を経て、2003年に国立西洋美術館に入職、情報資料室長として図書やコレクション情報の整備に従事。2023年より現職。リサーチポータルサイト「アートプラットフォームジャパン」を運営。学生時代の専攻は西洋美術史。 笠井康平（東京大学大学院人文社会系研究科博士課程1年） - 作家・編集者。著書に『さみしがりな恋人たちの履歴と送信』がある。編著にヴァージニア・ウルフ『灯台へ』（葛川篤訳）。専門分野は近現代日本文学、データサイエンス、人文情報学、文化経営学など。 溝上心太（東京大学大学院人文社会系研究科博士課程1年） - 2020年に京都大学文学部（美学美術史学専攻）を卒業後、同年経営コンサルティングファームに入社し、民間企業のDX推進（データ利活用支援）支援に従事。25年に東京大学大学院修士課程を修了。専門分野は文化経営学。 司会進行：小林真理（東京大学大学院人文社会系研究科教授）

分科会①　7月6日（日）10:00-12:30

2-A まちづくり

座長	古賀 弥生（芸術文化観光専門職大学）

論題	酒蔵のある伝統的町並み保存の経済効果と教育効果：観光口コミサイトの投稿の解析
発表者	谷口 みゆき（京都橘大学）
討論者	滋野 浩毅（京都産業大学）

論題	大阪における都市文化政策の展開と今日への課題
発表者	本田 洋一（大阪市立大学）
討論者	吉田 隆之（大阪市立大学大学院）

2-B 伝統文化・クリエイティブ産業

座長	高島 知佐子（静岡文化芸術大学）

論題	日本の伝統染色の戦後史と持続可能性に関する考察
発表者	保田 優太（経済産業省）
討論者	安嶋 是晴（富山大学）

論題	茶と香の経営戦略──老舗企業にみる伝統と革新のダイナミズム
発表者	飯塚 まり（同志社大学）
討論者	安嶋 是晴（富山大学）

論題	花街の支援－京都「おおきに財団」の活動を中心に—
発表者	中原 逸郎（楓錦会）
討論者	川北 眞紀子（南山大学）

2-C 計量分析

座長	田中 敬文（東京学芸大学）
論題	ファンによる推し活の経済効果とコミュニティ型の市場の媒介者の役割
発表者	荒木 由希（金城大学）
共同発表者	村本 睦子（北陸先端科学技術大学院大学）
討論者	八木 匡（同志社大学）
論題	幼少期の文化芸術活動経験と労働生産性
発表者	飯田 星良（追手門学院大学）
討論者	八木 匡（同志社大学）
論題	CIL（Cultural Innovation Leadership）における文化・芸術事業支援実践 ― 文化・芸術の自然科学的要素分解の試みと支援応用
発表者	泉志谷 忠和（京都大学大学院）
討論者	松本 文子（大阪大学／国立民族学博物館）
論題	日本の文化システムも国際的な紛争を忖度するか？文化システムと政治システムの依存性の検証
発表者	保原 伸弘（東京福祉大学）
討論者	片山　泰輔（青山学院大学）

2-D 会員企画セッションⅠ　10:00～11:45

テーマ	「常識」にとらわれない公立劇場の経営 ―日本の文化政策・ 自治体文化行政 ・創造都市・劇場経営の観点から捉え直す―
企画趣旨・内容	本セッションは、すべての人々がいかなる環境にあろうと生きる意欲を持って生きることを保障する拠点の形成及び、社会のあり方を変革する 機関としての劇場 ・ 音楽堂の社会的役割を果たすことについて深く考える場とすることを目的とします。 1912年に発表したシュンペーター『経済発展の理論』の「新結合」（new combination）という概念は、「従来の常識では組み合わせたことのない要素を組み合わせることによって、新たな価値を想像すること」と定義されています。この枠組みを借りれば、文化芸術におけるイノベーションとは、いわば「思い込み」や「常識」から離脱して、思いもよらぬものを結合させて新しい価値を創造することなのではないかと考えられます。この概念を更に公立の劇場・音楽堂に当てはめてみた場合、どのようなことが想起されるでしょうか。 14年間可児市文化創造センターalaの館長を務めた衛氏は、「劇場・音楽堂は、人間がど真ん中に据えられる場として社会機関の機能を有する人間の家である。また、芸術機関に深く根を張っている常識にとらわれず、社会政策の概念である社会包摂を結合させるソーシャル・ブランディングである」と述べ、「その劇場経営は、あくまでも手段であり、その経営によってどのような社会を成立させるかが最終目的である」と説いています。 創造都市研究の日本とアジアにおける第一人者である佐々木氏は、「創造産業や創造人材は、創造都市には欠かすことのできない重要な要素であり、日本は市民一人ひとりが創造的に働き、暮らし、活動する都市に成長していくことが求められている」と説きます。氏の著『創造都市と社会包摂』の第一章においては、文化多様性と社会包摂に向かう創造都市のビジョンと日本の文化戦略を語り、コミュニティ再生への期待と展望を力説しています。 数多くの自治体文化政策に関わり、指定管理者制度への提言も豊富な中川氏は、ある講演で「自治体文化政策の明確な方針のもと、公立劇場が理念を掲げ、目標を設定し必要な方策を立案する経営政策は、アート・アドミニストレーションである。公立劇場は、一体何のために、誰のためにどのような社会的変化を達成しようとするのかが重要である。公立という限り、その公益を達成する必要があるが、公益は赤字でよいと甘えるのではなく、赤字を補填するための経営努力が必須である」と明言しています。 国民の負託に応える公立の劇場・音楽堂は、憲法第十三条にある『個人として尊重』される『幸福追求権』が保障される場所でなければなりません。登壇者の経験と知見に基づいた考えに学び、「常識」にとらわれない公立の劇場経営について、参加者の方々と共に様々な観点から多角的に捉え直したいと考えています。
登壇者	パネリスト 衛紀生　可児市文化創造センター ala 前館長兼 前 劇場総監督 佐々木雅幸　大阪市立大学名誉教授 中川幾郎　帝塚山大学名誉教授 司会進行 半田将仁 松浦正和　可児市文化創造センター ala 職員 総合司会 柴田英杞　公社 全国公立文化施設協会アドバイザー

分科会②　7月6日（日）14:20-16:50

3-A 文化教育

座長	萩原 雅也（大阪樟蔭女子大学）
論題	ミュージアムにおける教育普及活動の歴史的変容
発表者	谷口 彩（SAI Co-Cre Labo）
討論者	川井田 祥子（鳥取大学）
論題	バリアフリーコンサートの実践的研究－滋賀大学教育学部附属音楽教育支援センターおとさぽの事例をもとに
発表者	林 睦（滋賀大学）
討論者	川井田 祥子（鳥取大学）
論題	美術実技系学科卒業後の状況について
発表者	井上 智晶（東京大学大学院）
討論者	佐野 直哉（青山学院大学）

3-B　文化観光

座長	竹谷 多賀子（龍谷大学）
論題	文化観光の理念と政策的対応の誤謬－北九州市の文化事業を事例に
発表者	田代 洋久（北九州市立大学）
討論者	阪本 崇（京都橘大学）
論題	仮想評価法とコンジョイント分析のミックスドメソッドによる公立ミュージアムの価値評価 ～金沢21世紀美術館を事例に～
発表者	北川 有美子（金沢大学大学院）
共同発表者	佐無田 光（金沢大学）
討論者	阪本 崇（京都橘大学）
論題	地域型現代美術プロジェクトにおける文化起業型コミュニティ開拓―東京都山間部の 『あきがわアートストリーム』を事例に
発表者	岡田 智博（東京藝術大学）
討論者	佐々木 雅幸（大阪市立大学）
論題	ポップカルチャーを活用した地域活性化一考察
発表者	簡 逸威(鳥取短期大学)
討論者	清水 麻帆（文教大学）

3-C　会員企画セッションⅡ　14:20～16:05

テーマ	伝統産業としての繊維・アパレル・ファッション産業
企画趣旨・内容	2023年9月に部会「産業としての伝統工芸研究会」を設立し、これまで4回の研究会を開催してきた。本研究会の関心は、原材料の調達から製品の流通までの全てのプロセスが不可分に結びついている産業として、伝統工芸を維持していく必要があるという点にある。 今回は、前近代から地域の経済を担い、近代化によって発展した繊維産業をアパレル、ファッション産業を含むものとして捉え、産業構造の変化と各産地の取り組み、さらには繊維産業を支える衣文化の変化に着目し、以下の発表を通して伝統産業としての繊維産業の特徴と未来について議論する。
登壇者	発表： 江上美幸（日本経済大学） 「ファッションブランドに見る『進化的意味的価値』の構造と応用可能性に関する一考察：BAPEの価値創出メカニズムと伝統工芸への展望を探る」 奥山雅之（明治大学） 「繊維製品分野における使用価値と価値共創」 馬場　武（鹿児島大学） 「大島紬織物産地における価値創造の機能の現状分析：産地エコシステムの中核機能の検討」 コメンテーター： 近藤誠一（TAKUMI -Art du Japon／国際ファッション専門職大学） 滋野浩毅（京都産業大学） コーディネーター： 後藤和子（同志社大学） 高島知佐子（静岡文化芸術大学）

3-D　会員企画セッションⅢ

テーマ	文化経済学と実証分析 －永山貞則先生追悼セッション－
企画趣旨・内容	文化経済学会＜日本＞の第3代会長を務められた永山貞則先生が，2024年11月にご逝去されました．永山先生は，文化に関する統計データの整備や統計データを利用した客観的な文化の実証分析に多大なる貢献をされるとともに，共同研究などを通じて多くの研究者を支援・指導してこられました．この会員企画セッションでは，永山先生が文化経済学において有用な統計として特に重視してこられた総務省「国勢調査」・「社会生活基本調査」及び「現代青年の芸術意識と芸術活動調査」（学生調査）・「日本の芸術家調査」などを取り上げ，永山先生の薫陶を受けた研究者を中心に、それらの統計データの文化経済学における意義や実証分析に関する報告を行い，討論者やフロアの参加者も交えての議論を通じて，永山先生の文化経済学におけるご貢献を改めて評価する機会をもちたいと思います．
登壇者	1. 有馬昌宏（兵庫県立大学） 「全国学生調査が明かす大学生の文化・芸術関連活動の実態と変遷」 2. 周防節雄（兵庫県立大学） 「『日本の芸術家4000人調査』から見た20年間の日本の音楽家，舞踊家，演劇人の所得分析」 3. 古隅弘樹（兵庫県立大学） 「国勢調査の個票情報を用いた移動世帯パネルデータの作成および移動要因の分析」 4. 勝浦正樹（名城大学） 「コロナ禍の文化的活動への参加に対する影響 ― 社会生活基本調査を用いた実証分析 ―」 5. 坂部裕美子（統計情報研究開発センター） 「ミクロデータを用いた芸術鑑賞行動の時　系列比較－演劇・美術・音楽」 討論者：西郷浩（早稲田大学）